教室内会話での話題選択についての考察

小笠　恵美子

1.研究目的

日本の高等教育での、授業中の話し合いではどのような秩序があるのかを明らかにすることを目的とする。特に、本研究では会話分析の手法により、会話参加者が、会話を自分の望む方向に持っていくことと、他の会話参加者との人間関係維持とのバランスをどのようにとるかという点に着目して分析した。

2.研究方法

エスノメソドロジーの手法を使い、各場面の記述を重ね、その場面の規則を明らかにしようとした。

データは授業中の会話のトランスクリプトと、授業に関するアンケートからなる。授業中の会話は大学院生が3から4人に分かれて話をしている場面を3回に亙って採取した。アンケートは、授業中に発言する際に気をつけることは何か、授業中にグループで話をすることの利点は何かについて自由記述の形式で答をもとめた。

3.分析方法

分析は話題に注目して行った。

3.1　話題に注目する意義

話題がどのように始まり、発展し、終わっていくかの構造は、会話場面の特徴を示すものと見なされ(メイナード:1992)、Watanabe(1993)では、日本人とアメリカ人の議論における話題の構造を比較し、両文化で議論の仕方がいかに違うかを論じている。また、ダイヤモンド(1995)では、話題と会話参加者の力関係について分析がなされ、話題の提示や、提示された話題の取り上げられ方は、話者の地位と関係があることが示されている。

3.2　話題の定義

話題（テーマ）とは、情報によって関係付けられる枠組みであり、会話の中で、参加者が互いに協力し合って展開していくもの。新しい話題は会話参加者が共有する古い情報に何らかの新しい情報が付け加えられることによって展開する。(メイナード:同上)

3.3　話題の分類方法

話題の内容、前の話題との内容的な関係の二つの観点から分類した。

話題の内容による分類

a)話の場面、環境に関わるもの－「隣のグループの声がうるさい」など

b)メタコミュニケーション－発話場面を言葉によって調整しようとすることで、これによって、その会話場面の参加者達が既に発された言葉や発話行動をどのように感じているか、どのように評価しているかを明らかにすることができる。

例)「その話は置いといて」－発話者自身が何らかの理由で前の発話の更なる発展を打ち切ろうとすることであり、その発言に対する反対がされない場合、他の参加者も、自身の体面、提案者の力の強さ、話題のおもしろさ、適切さなど何らかの理由でそれに従っていることがわかる。

c)レジュメの内容

前の話題との内容的な関係による分類は、村上、熊取谷(1995)の分類方法による。

a) 新出型－まったく新たな話題で前の話題との関係がない

b) 派生型－前の話題から派生したもの

c) 再生型－一度修了した話題がもう一度取り上げられる場合

話題の派生の型には、入れ子状になるものがあり、それは、一つの話題 A から新たな話題 B が、B から新たな話題 C が派生した場合、A と C の関係は明らかでなくなるような話題の展開のことである。その結果、入れ子の階層がすすむにつれて話題はもとの内容から離れていく。

4.結果

4.1 アンケートによって得られた結果

グループで話し合うことの利点

－些細なことでも質問することができる、
思いついたままに考えながら話すことができる

授業中に発言する際に気をつけること

－全体で話をするときには自分の発言をモニターするのに対し、グループではその必要を感じない

これらの結果、グループでの話し合いでは全体で話すよりも気安く、制約が少ないと感じられていることがわかる。

4.2 トランスクリプトの分析の結果

4.2.1 メタコミュニケーションに見られる会話の規則

メタコミュニケーションとして、会話の途中で「(話題が)違う」という発話が出現するが、そのときの話題の性質と取り扱いを比較すると、話題の内容によって「違う」というメタコミュニケーションの意味が変わるということがわかる。

例－a)レジュメの中の誤字について話している場合、その後その話題は失礼であるというメタコミュニケーションが続き、その話題は打ち切られる。

b)レジュメの内容について新たに話題を提示する際に生じる場合、「違うかもしれないんですけど」という言葉を発しながらも、その話題は提示され、取り上げられる。

この場合、a)では話題が打ち切られ、b)では打ち切られなかったことから、会話参加者が、その話題の性質によって、話し合うべき対象と見なすか否かの判断をしているということが分かる。

4.2.2 話題の派生の仕方に見られる規則性

話題の内容が「環境」、「メタコミュニケーション」であるばあい、その次に続く話題は、内容的に「新規」に提示されたものであり、「派生」ではない。このことから話題がレジュメの内容でない場合、その話題は新たな話題を派生させる発展性を持たないことがわかる。

入れ子型の派生は、授業中の会話では4層までしか進まない。各層はそれぞれ、1層目:レジュメの内容、2層目:レジュメのどの部分についての話か、3層目:2層目に関する意見や例、4層目:3層目に対する感想という特徴をもっている。入れ子が4層までしか進まない理由としては、入れ子の層が重なるにつれて、もとの話題であるレジュメの内容から離れていくことが考えられる。それはメタコミュニケーションにも現れており4層目で話題の確認をしている例がある。その場面は、1層目が、レジュメ、2層目がレジュメ内の「提示された話題を取り上げないということは提示者のフェイスを脅かす」という記述について、3層目がフェイスを脅かすということについての説明、4層目が、3層目の例を「断る場合」という例を挙げての確認という流れで続いている。その4層目が少し長く続いた場面で、「なぜ今、『断る場合』について話しているのか」という質問が出る。これはメタコミュニケーションであり、

4 層目が長く続くとレジュメの内容から離れていくため、レジュメとどういった関係があって話をしているのかの確認が必要であることを示すものである。これらのことから、授業中の話題の規則としてレジュメの内容からあまり離れたところで話題を展開してはならないということが考えられる。

この規則の例外として、教師が積極的に入れ子の層の増加に加わった場合が挙げられる。その場面では教師は積極的に話に加わり、層が増えていくことにかまわずいろいろな情報を求め、その場合は入れ子が 7 層になるまで話が展開するということが起こっている。

5.考察

アンケートでは、全体での話し合いでは話の流れや適切性を考慮する一方、グループでの話し合いではざっくばらんに、自由に発言できるという結果が出たが、実際には、グループの話し合いでも話題の派生の仕方には一定の秩序があり、話の流れや適切性は考慮されているということが分かる。また、教師が積極的に関与した場合にはその秩序がくずれるという例から、教師は学生が無意識のうちに作り上げた授業中の制約を崩すことができるほどの力をもっているということが明らかになった。

主な参考文献

(1)藤井　桂子、大塚　淳子、杉山　ますよ、森下　雅子(1998)「討論におけるトピック意向の分析－日本人と学習者の比較から－」『各国留学生と日本人学生による共同研究－日中韓豪の討論場面における会話分析－』お茶の水女子大学　岡崎　眸研究室

(2)村上　恵、熊取谷　哲夫(1995)「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』62

(3)泉子・K・メイナード(1993)『会話分析』くろしお出版

(4) Diamond, Julie (1996) “Status and Power in Verbal Interaction”, John Benjamins Publishing Company

(5)Psathas, George (1995) “Conversation Analysis － The Study of Talk-in-Interaction－”Sage Publications

(6)Watanabe, Sawako (1993) ’Cultural Differences in Framing :American and Japanese Group Discussions’, edited by Deborah Tannen “Framing in Discourse”, pp.176-209, Oxford.